

Title	日本語引用形式の諸相 : 「ッテ」を中心に
Author(s)	岩男, 考哲
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45774
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	岩 勇 考 哲
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 19598 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	日本語引用形式の諸相－「ッテ」を中心に－
論文審査委員	(主査) 教授 春木 仁孝 (副査) 教授 沖田 知子 助教授 渡邊 伸治

論 文 内 容 の 要 旨

本稿では、引用形式の一種である「ッテ」という形式をその一部に含んだ表現についての考察を行った。従来、この「ッテ」を含んだ表現は、引用という現象の周縁的なものにあたることとされており、正面から考察されることは少なかった。しかし、周縁的であるからこそとも言えるが、この「ッテ」を含む表現は、引用表現に限らず実に様々な場面で用いられる。よって、この「ッテ」について考察することによって、引用という現象についての研究を更に深めることはもちろん、他の文法現象についての知見を得ることも可能となるのである。

第 1 章については、本研究の導入部にあたるため、ここでは割愛する。

第 2 章では、「ッテ」が一般に提題表現として扱われる現象についての考察を行った。具体例は以下の通りである。

- (1) 仲 「ちょっとパスポート出して」
山下「パスポートッテこれですか？」
- (2) 岩尾「とりあえず、これをどこかに埋めよう」
後藤「どこかッテ、どこだよ？」
- (3) 田中さんテ、器用だね¹。

これらの表現（以下「X ッテ Y。」と記す）は、数多くの研究において提題表現として扱われている。しかし、本研究では、これらの表現を全て均質的なものとして扱うのではなく、引用表現から提題表現へと至る、幾つかの段階のある表現として扱うべきだという案を提示した。

具体的には、(1)や(2)のような表現は、引用表現としての性格を明確に示す表現であり、(3)は、引用表現としての性格の大部分を失い、以下の(4)に代表されるような提題表現へと接近している表現である、と捉えることが可能である。現に、(1)(2)は典型的な提題表現だと言える「ハ」（以下「X ハ Y。」と記す）との置換が不可能であるが ((1)' (2)')、(3)はそれが可能である ((3)')²。

- (4) 人間△哺乳類です。
- (1)' 仲 「ちょっとパスポート出して」

¹ 「ッテ」の直前が「ん」の場合、「ッテ」の「ッ」が落ちて「テ」となることが多い。

² 例文の前についている「*」のマークは、当該の文が文法的におかしな文であることを示す。

山下「*パスポートハこれですか？」

(2) 岩尾「とりあえず、これをどこかに埋めよう」

後藤「*どこかハ、どこだよ？」

(3) 田中さんハ、器用だね。

つまり、「X ッテ Y。」とは、(1)や(2)のような、引用表現としての性格の濃い表現を経て、「X ハ Y。」に代表される提題表現へと接近した用法(3)へと至る表現として捉えるべきものなのである。

この現象は、「X ッテ Y。」の通時的な拡張とも一致する。本稿内において行った通時的な調査によると、1900年前後の文学作品における会話部分に出現する「X ッテ Y。」は、その大部分が(1)や(2)のような、引用表現としての性格を明確に示す用法であったのに対し、1980年以降の作品になると、そのような偏りは見られなくなっていた。つまり、「X ッテ Y。」とは、かつては引用表現の働きを示す(1)や(2)の用法が主流であったものが、時とともに(3)のような用いられ方もされるようになってきたのである。

また、(1)-(3)間の文法化の進度の差を比べてみると、同じ「X ッテ Y。」という表現であっても、(3)のような用法のものが最も文法化が進んでいる、ということも明らかになった。このことも、同じ「X ッテ Y。」といえども、均質的に捉えるには問題があることを示していると言える。

「X ッテ Y。」という表現を上記のように捉えることによって、「X ッテ Y。」が（「X ハ Y。」と異なり）「対比」の意味を持たない理由、「X ッテ Y。」の述部（Y部）に属性・性質を述べる表現しか生起しない理由等、数多くの現象について説明することが可能となる。このことも、本稿の「X ッテ Y。」の捉え方の妥当性を示すものである。

そして、本稿では、「X ッテ Y。」という語の配列の働きについても考察した。その結果、「X ッテ Y。」の働きとして「X部についての情報をY部で付与する」といったことを導き出した。この定義の妥当性は、働きをこう定義することで「X ッテ Y。」が示す、「再定義」「捉え直し」といった意味の発生過程が説明できる、ということによって証明した。

第3章では、「ッテ」という形式によって終結する発話（以下、発話「X ッテ。」と記す）について考察を行った。具体例は以下の通りである。

(5) 早く来いッテ！

(6) 桜井「俺が、何とかするよ」

小島「何とかするッテ……」

(7) 明日は午後から雨が降るッテさ。

(5)-(7)を見ると、これらの発話「X ッテ。」は、実に様々な場面で用いられていることが分かる。しかし、これらの用法は無秩序に現れるわけではなく、X部の元の話者は誰かという点に注目することで、規則的に分類することが可能である。この観点から本稿は、発話「X ッテ。」には4つの用法が存在することを指摘した。その用法を以下に簡潔にまとめておく。

- ・ X部の元話者が聞き手の場合…………… 〈知識未定着用法〉
- ・ X部の元話者が話し手の場合…………… 〈押し付け用法〉
- ・ X部の元話者が話し手であり、
X部の末尾に「な（あ）」という終助詞が生起する場合…………… 〈表出的用法〉
- ・ X部の元話者が第三者の場合…………… 〈伝聞的用法〉

また、この4つの用法の発話「X ッテ。」における、全ての「ッテ」が終助詞等のような文末形式として機能しているわけではないことも述べた。具体的には、〈押し付け用法〉や〈伝聞的用法〉のような用法の場合の文末の「ッテ」は「ソウダ」「ダロウ」「ヨ」「ネ」等のような文末形式相当の働きをしており、その他の発話「X ッテ。」は、文脈上の理由により、（引用構文等の）「ッテ」以下の述部がたまたま省略されている表現である、ということになる。このことはつまり、〈押し付け用法〉や〈伝聞的用法〉等のような用法の「ッテ」は他の文末形式とパラディグ

マティックな関係を成していることになるので、文法化の進行したものである、ということも表していることにもなる。つまり、文法化が進むことと、「ッテ」が文末形式へと近づくことがパラレルになっているわけである。また、このことにより、従来の研究における、“「ッテ」は全て文末形式である”という扱いを改める必要があることを指摘したことになる。

この他に第3章では、「ッテ」をその一部に含む「ッテバ」「ンダッテ」という形式と発話「X ッテ」との比較も行った。例は以下の通りである。

(8) 早く来いッテバ。

(9) 明日から雨が降るンダッテ。

分析の内容を極簡潔に述べておくと、「ッテバ」は、発話「X ッテ。」と異なり、X部の元話者を設定せずとも、〈押し付け用法〉に類似した意味が確定していること、「ンダッテ」は、X部の元話者を設定せずとも、〈伝聞的用法〉に類似した意味が確定していることが明らかになった。このことから、「ッテバ」は〈押し付け用法〉専用の形式であり、「ンダッテ」は〈伝聞的用法〉専用の形式である、という仮説を提示することができた。この考察の結果を表にすると、以下の通りである。

元話者	用法	その他の形式
聞き手	知識未定着	
話し手	表出的/押し付け	ッテバ (押し付け)
第三者	伝聞的	ンダッテ

表：発話「X ッテ。」の用法と諸形式との関係

そして、第4章では、ここまで考察してきた「X ッテ Y。」と発話「X ッテ。」と引用構文との間にどのようなネットワーク関係を想定することが可能か考察した。この考察は、従来の日本語文法研究において「ッテ」を用いた形式（「X ッテ Y。」と発話「X ッテ。」と引用構文）の間には何らかの関係はありそうだ、という直観的な予測を可視的に示そうという試みでもある。今後の日本語文法研究に対してこの第4章のような視点を導入することは非常に重要なことだと思われる。

考察の結果、引用構文と〈押し付け用法〉〈伝聞的用法〉の発話「X ッテ。」とは、構文文法で提示されている「部分関係のリンク (Subpart link)³⁾」によって繋がっていることが明らかになった。また、引用構文と「X ッテ Y。」とは、その述部において事象を描くのか、出来事を描くのか、という点において異なる表現であり、この両者は「X ッテ+P。」という極めて抽象的なレベルにおいて繋がりを持つことも示した。それ以外の形式は、既に述べたように、「X ッテ Y。」や引用構文の述部が文脈等の理由によりたまたま省略されたものにすぎないので、独立した表現形式として扱う必要が無く、よって、「X ッテ Y。」や引用構文等との関係も想定する必要が無い。

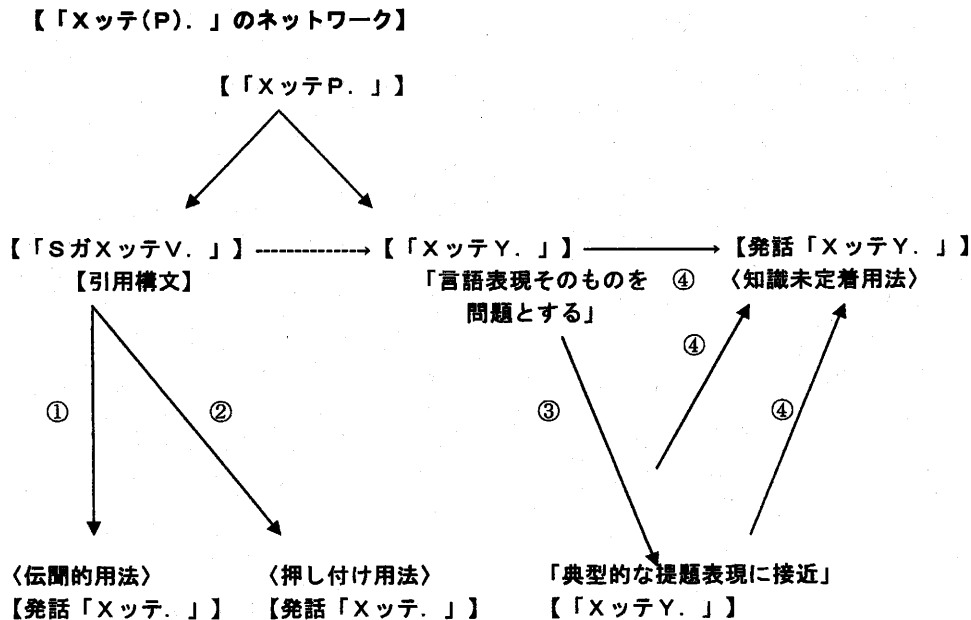
この第4章の考察結果を図示すると次頁の図のようになる。

なお、図の中の数字には、それぞれ以下の語が当てはまる。

- ①：「部分関係のリンク」
- ②：「部分関係のリンク」
- ③：「文法化」
- ④：「述部の省略」

このように図示することで、従来、日本語文法で考察されることの少なかった構文レベルの表現間にも何らかの繋がりを想定することが可能であること、そして、構文文法における考え方が日本語においても有益であること、英語の分析によって得られた知見が少なくとも、日本語においても見られること、等実に様々なことが明らかになった。

³⁾ Goldberg の提示する、構文間リンクの一つ。ある構文が独立して存在する別の構文の「真部分 (proper subpart)」である場合に想定されるものである。日本語で書かれたもので、この概念について分かりやすく解説したものに、河上編 (1996: 『認知言語学の基礎』 (研究社)) がある。



論文審査の結果の要旨

岩男考哲氏の学位請求論文「日本語引用形式の諸相－「ッテ」を中心に－」は、文中および文末における「ッテ」の機能について、その歴史的起源と思われる引用のマーカ―としての働きと関連させつつ、その諸用法を詳細に観察して、先行研究で扱われたものについて再検討するだけでなく、先行研究では検討されていない様々な用法についても考察したものである。

まず提題表現と考えられる「ッテ」の用例を検討し、引用表現としての性格が強いものから、より文法化が進んで「ハ」などの提題表現に近いものがある点を詳しく見て、提題表現ではありながらも「ハ」と違って対比用法が無い点や、その他「ッテ」特有の様々な現象に説明を与えている。

次に、文末表現としての「ッテ」を取り上げ、「Xッテ」のXの部分の元話者が誰であるかという観点から分類を試み、この形式には四つの用法が存在することを明らかにした。この文末の「ッテ」についても文法化の進行度から段階的な用法の変化を説明し、従来の研究ではすべて一括して文末形式であるとされていたものの実体を明らかにすることに成功している。

最後に、様々な用法間の関連を構文文法的な観点からネットワークとして関連づける試みを提示しているが、日本語の構文文法的な研究は始まったばかりであり、一つの可能性を提示している点で非常に興味深い。

当論文は、その目的と対象が非常に明確に設定されており、論旨も明快であり内容的には簡潔にまとまっていて安心して読める好論文である。欲を言えば、未解決の問題も含めて考察する対象をさらに広げることでより一層刺激的な論文にすることも出来たであろう。また、対象の表現が口語的なものであるだけに、関東方言だけではなく他の方言での表現をも考察することで、より厚みのある議論を展開することが出来るであろうが、それらは今後の課題であり、当論文が日本語研究に対して新しい知見を加えていることには違いはない。

以上のように、当論文は博士（言語文化学）の学位請求論文として十分価値のあるものと考えられる。